

Principal Correspondence

「人望を育てること」

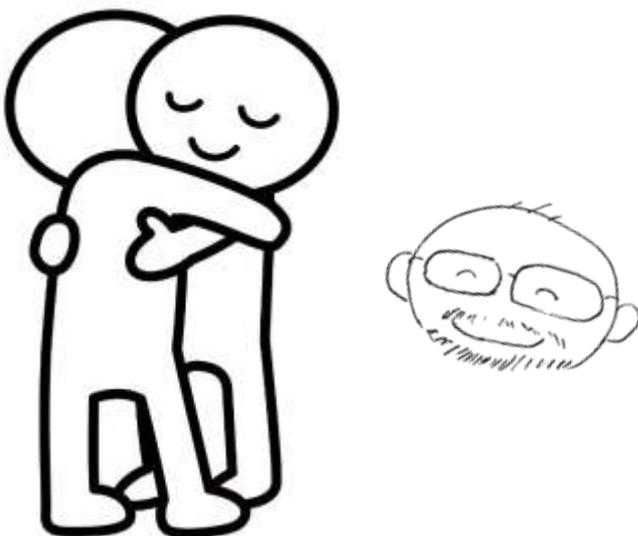
世の中で、自分の事しか考えない人に真の友人が少ないこと、人のうわさや悪口をいう人に人望が無いことを大人は知っています。反面、人の事を考え相手の立場を思いやって判断する人の周りに、多くの人が集まる事も事実です。これを「人望」といいます。**リーダーには欠かせぬ条件**です。

子どもの世界も小さいころは体が大きいとか、我が強いとか、生まれ月が早い子がリーダーシップを取ることが多いのですが、中学年ともなると、思いやりのある「人望」のある子がリーダーシップを取るようになっていきます(うれしいことも楽しいことも、苦しいことも、悲しいことも)。多くの経験を経ている子に多い様です。大人も同じかもしれません。

筑波大名誉教授の国分先生(「リーダーシップの心理学」講談社現代新書, 国分康孝著)は、人間には①愛情の苦勞②金銭的苦勞③時間の苦勞をさせた方がよいとも書いておられます。まあ、人間誰も、退学、留年、失恋、別離、倒産、失業、病気、不和などを全て経験する訳にはいきませんので、こうした経験は小説や、映画、演劇などで追体験をする必要があります。

体験には、自然体験、運動体験、競争体験等ありますが、**私たちは様々なアートや文化体験も豊富に経験させて「感性」や「感受性」が豊かな人を育てていきたいと願っています。それらが人望やリーダーシップの基礎になります。**

人は周りの人に認められ、愛される人生を送ることが幸せの大事な条件です。
そこでなお、自分の得意な分野で活躍できれば、言うことなし。
きっとお金や名誉はあとからついてくることでしょう。



Principal Correspondence

21世紀型能力とは

よく21世紀型学力という言葉が聞かれます。

OECD(簡単に言えば先進国クラブ・34カ国加盟)の提唱するPISA(Program for International Student Assessment)とは国際学習到達度調査です。加盟国の15歳を対象に3年ごとに読解力, 数学的リテラシー, 科学的リテラシーを調査しています。

荒っぽい要約ですが, 21世紀型学力とは, 今までの受験勉強のような暗記力や, 与えられた問題を解く能力ではなく,

- ①課題そのものを設定する能力「問う力」
- ②さらに自分でリサーチして「調べる力または, 解決策を見出す力」
- ③それを表現し周囲の人に伝える「コミュニケーション力あるいはプレゼンテーション能力

を言います。

20年ほど前, ゆとりの時間を作って文部科学省はPISA型学力を伸ばそうとした?ののですが, 見事に失敗をしました。私が考える失敗の原因は下記のとおりです。

①基礎学力がない(つまり学力の低い)子に, 創造性を発揮して調べたり解決策を見出したりすることを求めるのは難しい。まず「読み書きそろばん」の基礎は詰め込むべき(ゆとり教育は成績優秀な子には有効だが成績のばらつきがあるクラスでは効果が薄いのです。)

②「問い」気づくのは感受性。それには幼少期に座学ばかりでなく, 実体験を多くつませて情操豊かに育てておかなければならないこと。

③宿題を自主的にやるとか, 夏休み自由研究に取り組むなどの自己学習の習慣は3年生までに徹底しておく。

学童保育ではできるだけそこを配慮しています。ご家庭のご理解とご協力をお願いします。

